

〈汝〉の逆説——西田幾多郎の他者論について

猪ノ原次郎

序

西田幾多郎の他者論¹⁾に関して、根本的な疑問を二つ提起したい。一つは、そもそも〈汝〉の独特の有り方を語るこの他者論らしきものの眼目がどこにあり、いかなる問題地平における議論なのかということである。他我問題にせよ他者に関する倫理的問題にせよ、西田の論述には枝葉として登場するだけである。しかも西田はどうやら〈汝〉を必ずしも「他の人間」に限ってさえいないようであり、「物の人格化」について語り、ある箇所では山も川も汝の意味を有つとまで述べている。こうした箇所を読むと、我々は西田の言う〈汝〉の掴みどころのなさに戸惑い、途方に暮れてしまう。

疑問の第二は、西田の〈汝〉論の核心、つまり〈私と汝〉の関係をめぐる議論が、あまりにもあからさまなパラドクスをテーゼとしているように見えることである。西田はある講演では端的にこう述べている。「人格は互に絶対に独立であるが、それ故にかえって結びつく事でなければならぬ」(十二・245)。もし西田他者論を神秘的境地とか近代リベラリズム輸入の哲学的余波として陳列するのでなく、我々自身の生きた思考と接合したいのならば、このそれ故にかえっての逆説に折り畳まれた意味を明示化し、そこに込められた洞察をすくい取らねばならないだろう。

二つの疑問ないし課題は、結局は一つの連続した考察によって答えられることになる。ひとまず我々は、久しくなじみ深いものとなった「他者論」的な枠組みを忘れてテキストに向き合い直し、西田において他の人格＝〈汝〉がいかなる脈絡と問題地平のもとに出現したのかを了解し直さねばならない。手掛かりとなるのは、〈汝〉が問題となるのは常に人格的自己＝〈私〉の条件を考察する場面においてであること、である。まずは人格的自己の規定を確認することから西田の思考に分け入っていき、〈汝〉の出現を見届けよう。その後〈私と汝〉の関係という西田他者論の中核的議論を検討し、〈汝〉の逆説の意味について一つの解釈を提示しよう。

一 人格の合理性——時間と表現

西田が「人格的自己」——〈私〉について論じる際、しばしば考察の糸口となるのは人格の二つの側面である。すなわち、過去-現在-未来に渡る時間的存在であることと、他の人格(汝)に相対する人格であることである。論文「私と汝」の冒頭では、私の過去-現在が内的直接的に結合する関係であるの

に対して、私と他者の相互理解は言語等の表現を介した外的間接的な関係である、という直観的な対比がなされている（五・267）²⁾。

しかしこれは議論への導入にすぎない。西田が把握しようとしているのはこの二つの関係——内的直接的時間関係と外的間接的表現関係——それ自体の交わり、あるいは相互陥入であり、二元的な区別はすぐに崩れ去る。「昨日の私と今日の私とは、私と汝との如く共に表現の世界に於てあるのである」（五・269）。一見すると間接的な表現関係と、一見すると直接的な内的時間的連続は、既にして重なっているというのである。つまり、西田の人格論の分析のためには二側面の直観的理解ではまったく十分でなく、時間関係と表現関係の絡み合いを解きほぐしていかなければならない。我々は考察を進めるにつれて、この交わりを幾度か捉え返すことになる。

そのためにもまずは、一般に「表現」およびその理解が属すると考えられる秩序、すなわち「合理性」という主題へ迂回しよう。合理性／非合理性は、表現と時間を接合すると共に、人格的自己の規定の一種を構成してもいるからである。西田によれば、人格的自己の規定を突きつめて考えていくと、合理性と非合理性が交錯する一点に行き着き、両者の要請が帰結することになる。まずは合理性である。

人格的なものは先ず合理的と考えられねばならない、合理的に自己自身を限定するものと考えられねばならない。単に非合理的なるものは物であって人ではない。（六・15）

物の非合理性とは、物質の運動は因果関係によって必然的に限定されており、合理性に従っているわけではないということである³⁾。対して人格は、因果関係によって（のみ）規定されるのではなく、合理性の秩序のもとにある。西田は合理性の本質規定を与えているわけではないが、典型的には他者と言語表現を通じて理解し合うような関係に、因果関係と区別される合理性の秩序を見て取ることができるだろう⁴⁾。また人格がしばしば「人格的統一」という表現で言及されるように、ある種の統一として観念されていることから、西田の言う合理性には、多を一へとまとめあげ統合する「統一」の意義も込められていることがわかる。つまりは理解し、思惟するものとしての合理性である。

かかる合理性は、まずは表現的關係の属する秩序であるが、人格の時間的存在としての側面にもやはり重なっている。この点、同時期の西田にとって、「自己」とは単なる「意識的自己」ではなく「行為的自己」、行為する主体と

しての自己を意味していたことが重要である。

行為的にして表現的であり、無の限定として点から点に移り行く非連続の連続と考えられるものは、人格という如きものでなければならない。人格的統一と考えられるものは之を意識内に求められるものでもなければ、況して之を生理的肉体に求むべきものでもない。唯それは所謂客観的精神という如きものと同様の意味に於て有と考うべきものである。昨日の我と今日の我と直に結合するのは所謂意識内に於て結合するのではない。然らばと云って脳の皮質がかかる役目を演ずるとも考えられない。それは歴史的世界における行為的表現の統一として考えられるのでなければならない。(五・211)

西田の記述はあまりにそっけないので、我々自身で議論を補足せねばなるまい。——いやしくも行為主体と見なされるためには、過去から未来に渡る時間上における言動の相当程度の統一性・合理性はほとんど不可欠の条件であろう。しかもその合理性とは、単なる内観的ないし物質的（因果的）な連続性ではなく、例えば一貫性をもって約束とか計画を成立させたり、過去の情報と未来の見通しのもとで一連の統御された行動によって欲求を実現したり、またそのような行動として他者から理解されるような、歴史的に統合された言動に見られるものでなければならない。つまり、行為を一種の表現と見た場合の、その表現する意味における統一でなければならない。人格の時間性は、外的物体に見て取られるような持続としてあるのではなく、過去から未来に渡る多数の時点間の表現的相互関係によって成り立つ統一なのである。

二 人格の独自性から「絶対の他」へ

しかし、「非連続の連続」に示唆されてもいるように、行為的表現の時間的統一というこの合理性は、人格の半面に過ぎない。人格は一面では合理性という一般的秩序に服するものであっても、それに尽きるのではない。というのも、西田にとって人格とは何より個物的なものであり、そこでは各々の個別性・独自性が根本的だからである。「単に合理的と考えられるならば、我々の個人的人格という如きものは失われなければならない」(六・15)。合理的主体というだけでは一般的理性の一特殊例にすぎず、西田の術語で言えば「一般者」の自己限定にすぎないのであって、「人格」の意味に届いていないのである。

ここから、西田の言う人格は法権利上あるいは習慣上妥当な対象に帰属される一般的性質の如きもの（としての「個人」）とは異なることがわかる。つ

まり、一般的対象としての人格ではなく、具体的な主体（行為的自己）としての人格が問題なのである。また上述のように人格を時間的統一として見た時も、単なる過去-現在-未来の統一では、そこにはいわば合理的行動計画とも呼ぶべき一つの時間的連続があるだけであり、自己が有るこの〈現在〉の個別性・独自性が取りこぼされてしまっている。行為主体としての自己は、単に現在の瞬間に閉じ込められているわけではないが、時間的にいわば中立的なただの観察者でもない。〈私〉は〈現在〉からのみ、行為を通じて過去や未来と関わることができるのだ。西田はかかる自己や現在のリアリティを人格に不可欠なものとなししているのである。

かくして一旦は「人格」から切り離されたかに見えた非合理性が要請されることになる。

我々は何処までも個人的でなければならない、我々の底には絶対に非合理的なるものがなければならない。而も非合理的なるものが合理的に自己自身を限定する所に、我々の人格的自己の自己限定と考えられるものがあるのである。（六・15）

合理性・一般性に回収され切らない非合理性、それが人格のもう半面である個別性・独自性のために必要なのである。しかも単に非合理性があればよいのではなく、「非合理的なるものの合理化」をこそ、西田は人格の核心として洞察している。重要なのは合理-非合理の対立ではなく、非合理的なものから合理性が生成する契機なのである。

西田がしばしば「非合理性」として挙げるのは、欲求や感覚、身体といったものであるから、まずは次のように理解できよう。すなわち、欲求や感覚といったそれ自体非合理的なものが行為へと合理化されること、それも時間を通じて統合された行為連関へと合理化されて表現されること、我々はそこに「人格」を見て取ることができるのである（西田においては知覚や判断も広義の行為である）。逆に言えば、その場その場で行き当たりばったりの欲求に突き動かされ、かえって何も満足に実現できずに自滅するような有り方など、時間的行為統一がほとんど見られないところには、西田的な意味での人格を認めることは難しい。

注意すべきは、この統一とは背後的な理性能力や統覚の如きものが非合理的なものを一方的に統一するのではないということである。あくまでも「非合理的なるものが合理的に自己自身を限定する」のでなければならない。も

し仮に人格を一般的理性能力に基礎づけようとすれば、自己はどこまでいっても一般的なもののからの流出にすぎないことになり、人格の個別性・独自性は非本質的なものとして理論的に抑圧されることになる。さりとて人格は物質的因果関係による構成物でもないことは、これもすでに確認した通りである。

私が非合理的なるものの自己限定というのは、何か知ることのできない深い或物があって、それが自己自身を限定するというのではない、限定するものなくして自己自身を限定するということである。（五・158-159）

一つ前の引用にある「人格的自己の自己限定」とはこの意味で理解されねばならない。すなわち、人格の限定は（いわば上位の）一般的合理性の自己限定でもなければ、（いわば下位の）物質的因果関係の自己限定でもあり得ないのであって、何らかの意味でそうした自己同一性（連続性）から外れる個別性・独自性（非連続性）を有するのが人格であるからには、人格は自己自身を限定するとしか言えない、ということである。西田にとって、物質的因果や一般的理性はどこまでもいってもそれらの本性と連続するものしか生まないものであるから、個別的独自の人格の限定根拠となり得ないわけである。

我々の見るところ、西田の思考がここで折り返すことで、「絶対に他なるもの」が議論に出現する。つまり西田は、人格的自己が自己限定的存在であるためには、その根柢に、成立する自己の合理性と自己同一性から断絶した「絶対に非合理的なもの」「絶対に他なるもの」がなければならないと考えるのである。私が他でもない私であるために、物質でも一般的理性でもない絶対他性が「私の底」にななければならない。

しかし、これはもはや当初前提されていた物質的な「非合理性」とは別物であって、「絶対に非合理的なものの意味を有すると共に、我々が之に於て生れ、之に於て生きるという意味を有つもの」（五・287）である。西田は「我々の行為的自己に対しては、非合理的なものの意味が変ぜられなければならない」と述べている（同頁）。人格について思考する時、非合理的なるものの理解そのものが革新されねばならないのである。この「非合理的なるもの」は、単に合理性に反していたり合理性と無関係であったりするのではなく、それ自身絶対に非合理的でありつつ合理性を生み出す場となるようなものでなければならない。——そして、かかる「私の存在条件」（六・212）こそは〈汝〉

であると言われるのである。

以上、人格的自己＝〈私〉の規定の考察を辿り直すことで、〈汝〉の出現する脈絡を見て取ることができた。要するに西田は、この考察を進める中で私の底になければならない「絶対に他なるもの」、しかも私を私たらしめる人格的自己の条件であるものを見出したのである。しかし、なお立ち止まって解明されるべきは、かかる絶対他性が〈汝〉——他の人格として把握されるそのいきさつである。我々は、あの〈それ故にかえって〉の逆説への問い——おそらくその答えを半ば現しつつある——を念頭に置きつつ、〈私と汝〉の関係という西田他者論の核心に踏みこんでいかねばならない。

三 私と汝

西田は「絶対の他」との関係について次のように言う。

自覚に於て自己の中に絶対の他を見、他が自己の意味を有つと云う時、我々に対し絶対の他と考えられるものは自己自身を表現するものの意味を有たなければならない、かかる関係の底には人と人との関係がなければならない。而して人と人との関係ということは話し合うと云うことでなければならない、互に応答すると云うことでなければならない。(五・306-307)

ここで「人と人の関係」と言っても、その〈人格〉の内実そのものが未だ問題的であるのだから、絶対の他をただちに「他人」と同一視することはできない。言われているのは単に、「絶対の他」との関係は、「話し合う」関係を範型として、つまり表現的關係として理解すべきであるということにすぎない。しかも「話し合う」関係は、単に各々が表現を通して対象を理解するというのではなく、「人格的行為の反響」「行為と行為の応答によって私と汝とが相知る」(五・306)とも言い換えられるような、それ自体相互的で実践的な関係であるという。それは「私の表現の類推」によって、自己の相似物として汝という人格を知ることではないし、「汝の表現に没入する」ような「感情移入」でもない(同頁)。〈汝〉とは私の存在の条件たる他性なのだから、初めから存在する確固たる〈私〉を土台に〈汝〉を理解することはできない。むしろ相互的な応答関係によって私と汝が「相知る」と共に、初めて私が私自身を知り汝が汝自身を知るのであり、かくて逆説的にも絶対他性との出会い「自覚」的なものとならざるを得ないのである。それゆえ、この表現的關係は単なる客観的な意味の了解ではなく、人格自身を限定する作用——「表

現的限定」である。

上の引用でさらに注目すべき箇所は、絶対の他が「自己自身を表現する」という点である⁵⁾。表現関係において、表現は普通、何らかの内容を表現する。つまり、他の何かを意味するのであり、これが「表現するもの（記号・言語など）」-「表現されるもの（意味）」という関係として通常我々が了解していることであろう。しかし、汝は自己自身を表現する。この点が、西田が明確に強調した〈汝〉の特殊性である。

而してその他が汝であるという時、私と汝と話し合うものは、単なる表現の内容という如きものではなくして、私が私の自己限定としての事実を、汝は汝の自己限定としての事実を話し合うということができる。

（五・316）

自己自身を表現することの特殊性は、前節で見た人格的自己の自己限定の特殊性にぴたりと重なっている。汝が自己自身を表現するということは、汝が自己自身を限定するものであること、ただ何らかの内容（世界の事実や主体の意図など）を表現するだけでなく、自己限定的なものとして有するという事実そのものを表現することを意味しているのである。

つまり、自己自身の表現とは、一般的理性や物質的因果関係から自己同一的（連続的）に流出する表現ではなく、自己限定的人格すなわち独自の時間的行為的統一（非合理的なるものの合理化）の表現なのである。汝の自己表現とは、言うなれば他の時間の表現である。「我々が自己自身の底に絶対の他を見ると考える時、無数なる時の流というものが考えられる、各人が各人の時を有つと考えられる」（五・314）。——「絶対の他」が他の人格＝〈汝〉である理由は、ここから遡って初めて理解されるだろう。すなわち、まさしく汝という人格自身の表現である人格的自己表現は、上位や下位のいかなる要素・一般的原理にも還元されたり基礎づけられたりされ得ず、それゆえ、かかる自己表現をその一般者の自己限定態として完全に規定し得るようないかなる一般者も存在しない。つまり、表現関係と言っても、私と汝との「あいだ」にあつて両者の理解を媒介するものとして表象され得るような、いかなる一般的媒介（言語の一義的意味、理性、感情移入、物質的因果……）もないのであり、西田流に言えば、私と汝が共に「於てある」いかなる共通の「一般者」もない。だからこそ汝は、私にとっていかなる相対的尺度も絶した「絶対の他」、既存の一般的意味として了解することのできない「絶対の非合理」なのである。まただからこそ汝は、私と汝が共有し得るいかなる場所にもな

く、「私の底」以外には有り得ないのである。この意味での無媒介性のゆえに、「かかる過程は絶対の他の中に私を見、他が他自身を限定することが私が私自身を限定することであると考えることができる」（五・305）

ちなみに、幾度か示唆してきた通り、そのような〈汝〉であり得るのは、言語的に疎通可能な他の人間だけとは限らない。自己表現は、合理的に理解されるべき何らかの内容の表現とは別のレベルで働くのだから、言語的なものにアプリアリに限定されることはない。実際西田は「情意において我々は物を内に見」て、「物を人格化する」ことがあると語っているし（五・304）、「絶対否定を隔てて相見る時、私に対するものは、山も、川も、木も、石も、すべて汝の意味を有つ」とさえ述べている（六・46）。だとすれば我々は、第二節で瞥見した感覚や欲求の非合理性を正確に位置づけるためにも、物の（固有の）時間について語らねばならないだろうが（それはもはや通常理解される物体ではなく、後期西田の言う〈個物〉である）、本稿ではそこに踏み込む余裕はない。いずれにせよ、〈汝〉とは存在者の固定的な性質ではなく、人格の自己限定という出来事と共に生成するものであることに留意しておこう。

さて、これが「人格の根拠は（他の）人格である」という単純な循環に尽きるのでないことは、時間関係と表現関係の交わりをこの地点から再度捉え返してみればわかる。西田は述べている。「今日の私は昨日の私を汝と見ることによって、昨日の私は今日の私を汝と見ることによって、私の個人的自己の自覚というものが成立するのである」（五・324）。私と汝の関係はそのまま私の現在と過去へ重ねられる。つまり、過去の私は自己表現的な絶対の他として〈汝〉であり、現在を表現的に限定するが、現在は現在の底にかかる絶対他性があるがゆえに自己限定的なものとしてある。〈現在〉の独自性という時間のリアリティは、過去を〈汝〉と見ることによって初めて捉えられるのである。また表現関係と時間関係がこのように絶対他性を織り込んで接合しているからこそ、時間は「非連続の連続」であると言われ得るわけである。

要するに、私-汝として相対する各々の人格的時間がまた、汝の如き絶対他者である過去との関係によって自己限定的に生成した〈現在〉の時間的統一なのだ。人格的秩序の循環は、単に循環しているのではなく、それ自身他性との関係を織り込んだ諸時間が交叉する、複合的な循環構造を成しているのである⁶⁾。

また、そのように人格的關係が縦横に生起し得るならば、過去の私、過去の行為（出来事）の表現作用も、原理上いつまでも確定されない多義性を潜在的にもつことになろう。過去が（汝として）現在の私を限定するというこ

とは、心的外傷のような極端なケースをもち出すまでもなく、ごく自然に理解できよう。しかしその過去も、現在の行為、あるいは現在における〈汝〉との出会いによって生成した新たな統合の中で、その意味（表現作用）を変え得るだろう。それゆえ〈私〉はそれ自身複数の可能的統一を含みもつのであり、だからこそ、我々は意想外の出来事や他者との出会いによっても、一撃ですべての合理性が崩壊したりせずに、試行錯誤的な実践により統一・合理性を立て直し得るのである（実際に合理性・統一の生成が成るか否かは事前にはわからないが）。そうした〈汝〉としての過去の自己表現は、厳密に言って、現在の私がコントロールできるものではない。なぜなら〈私〉そのものが、生まれ変わる過去との相対、また他者との相対によって、従って自己・現在の自己限定によって生成するからであり、〈私〉はかかる時間的統一の原因ではなく結果だからである。

四 〈汝〉の逆説のありか

かくて、人格的自己とは、自らの「底」の自己表現的〈汝〉を還元不可能な事実として認めつつ、己自身の統一を立ち上げるものであると要約できよう。その際〈汝〉は、既に〈私〉を表現的に限定している限り、他なるものでありながら単なる外的な客体として処理され得ず、また自己表現的である限り、単なる〈私〉の内的主観的自己同一性の部分に還元されることもできない。様々の逆説のヴァージョンがそこから生産されるだろう……「それ〔自覚的自己〕に於ては、非合理的なるものが合理的であり、外が内であると云うことができる」（五・321-322）。そして実に、かかる〈汝〉こそ〈私〉の存在条件である。それが絶対の他である限りにおいてのみ、現在の私自身、個別的独自の統一として、他でもない〈私〉なのである（人格的自己の自己限定）。

〈汝〉の逆説——あの〈それ故にかえって〉の真の意味は、今や明らかではないか？ つまり、西田他者論の逆説は、一見してそう見えるように、私と絶対に他なる汝とが奇跡的に結びつくということ、あるいは、非連続的な個が、にもかかわらず他者をありのままに受け入れる「愛」によって承認し合うということにあるのではない⁷⁾。それでは結局、西田がきっぱりと退けたはずの独我論的問題構成の内にとどまることになるだろう⁸⁾。そうではなく、真の逆説は、個別的独自の〈私〉が成立するためには、既に「絶対に他なるもの」＝〈汝〉と関わり合っているものでなければならない、という点にある。言い換えれば、自らの底に絶対の他との関係という非連続性を孕む意味

で非独立的な人格だけが、他者に対して非連続的な独立的人格であり得る。西田他者論の核心にあるのはこの逆説、私と汝のこの「弁証法的関係」(五・306)の洞察である。それは、私の存在がある独特の仕方では他者の存在を前提することを劇的に示した思考として、今なお固有の生命を保っているのではないか？

結語と展望

我々は、西田の議論において〈汝〉が〈私〉の存在条件として出現したという文脈を確認し、次いで西田他者論の核心的逆説に対して、かかる文脈に沿った一つの解釈を提示した。すなわち、その文脈の内実を構成する、(非)合理性・表現・時間といった諸主題の関係を描き出し、〈私と汝〉の問題をそこに位置づけて読み解くことで、かの逆説が一見した印象とは異なる仕方まさにパラドキシカルな意味をもつことを明らかにした。

しかし、以上見てきたような〈汝〉との出会いは、具体的にいかなるものであり得るだろうか？ 残念ながら西田はほとんどそれを書いていない。

我々は、例えば他人と出会う度ごとにかかる〈汝〉との遭遇があると強いて考える必要はないだろう。むしろ〈汝〉との遭遇は、他者との関わりにおいて対立的状況が生じた時に際立つものであるだろう。西田に従えば、我々は他者の個別の言表や行為の意味内容を了解しているだけではない。我々は、一般的・社会的コード(一般者)によって理解され得る個々の行為的表現のみならず、そのような表現の時間的統一たる人格の自己表現とも関わり合っている。従って、ある場面では、言表内容自体は一見有意味であっても、まさにその人の発話としては合理化しがたいということがあり得るし、あるいは同様に、よく知っていると思っていた人の言動の連関が突如理解し難いものとなることもあり得るのである。

そして、かかる非合理性が現われるとき、それを一般的理性によって天下り式に処理することはできない。その時には、空気のように当たり前にそこにあって利用できるものであったはずの言葉(一般者)さえ不透明なものとして立ち現われ、私と汝の媒介を一般に保証するものではなくなるだろう。そこではもはや、改めて汝という個別独自のなものとの「応答」関係を創り出そうと試みる個別実践が可能であるだけである。西田が時に「愛」による結びつきを語るとしても(そして時に西田自身その表象に惹かれているようだとしても)、それは本来なかなか苛烈な愛であるに違いない。「故に私は汝と同感することによって汝を知るよりも、寧ろ汝と相争うことによって一

層よく汝を知ると云うことができる」(五・306)。翻ってそこでこそ〈私〉も、自ら個別独自の統一であることを自覚せざるを得ない。それは、〈私〉という堅い核が元からあってそれが自覚されるというのではなく、〈私〉そのものが寄せ集めにすぎないという事実の自覚であり、同じことだが、その根柢で決して同一化され切ることのない他性に関わり合ってしまったことの自覚である。それはいわば〈私〉の破断と再統合の契機であるが、しかしその自覚的自己限定の契機にしか(窮極的には)人格主体としての〈私〉はないとも言えるのであり、だからこそ「自己が自己に於て絶対の他を見ると考える時、我々の自己は死することによって生きるという意味を有」するとすら言われる(五・310)(これも「非連続の連続」の意義の一部である)。逆に言えば、抵抗にぶつかることなくスムーズに日常を過ごしている時には、我々は出会う他者を一般的汝(五・328)として処理し、絶対他性を見なすこともないだろう。その時には自己もまた一般的自己(五・322)あるいは一般的理性と区別する必要はないし、おそらくそんな区別は容易にはできないだろう。

西田他者論について、上のような素描以上に具体的に考えていくためには、彼の後期から晩年にかけての思索を参照することも不可欠であろう。そこで西田は表現と他者性の関係をより明確に構造化するため、ライプニッツから「パースペクティヴ」の観念を借りて思考を深めていくのである。かかる西田他者論の展開を追跡・検討することが、我々の将来の課題となろう。

注

1) 本稿では、西田他者論の代表作と見なされる論文「私と汝」(1932年)の前後の時期の諸論文(『無の自覚的限定』(1932年)、『哲学の根本問題』(1933年))や講演を扱う。

2) 新版『西田幾多郎全集』からの引用及び参照は、漢数字で巻数、アラビア数字で頁数を指示して本文中に埋め込んだ。なお仮名遣いは適宜改めた。

3) 以下も参照。「而して斯く無限の過去から非合理的必然を以て我々を限定するものを物質と呼ぶならば、我々はそこに物質に撞着するということができるであろう」。(五・286)

4) 以下も参照。「表現の内容というものは大まかにロゴスのと考えることができる」。(六・94)

5) 複数の研究がこの「自己自身を表現する」という記述に着目しているが、

我々のようにこれを人格の自己限定と重ねて理解しているものは見当たらなかった。以下を参照。喜多（2015）、60 頁。熊谷（2005）、138 頁。藤田（2011）、132 頁。

6) 「時間についての彼の思索の特徴は、現在に対する過去、未来という非・即自的な時間のあり方に関わるものと、私と他者という、それぞれの人格とともにある時間に関わるものが、複合されるように入り混じっていることである」。清水（2017）、226 頁。我々とはやや異なるアプローチではあるが、清水はこの点を詳細に論じている。同書 226-234 頁を参照。

7) そのような解釈は、小林（1997）、194-198 頁や、喜多前掲論文、60-62 頁に典型的に見られる。確かに西田自身、単独ではそのように解したくなる「愛の統一」の記述をしている（例えば（五・172））。しかし我々は、かかる箇所も「真の愛とは絶対の他に於て私を見るということではなければならぬ」（五・328）といった記述と合わせて理解することで、先行研究とは異なるものの可能かつ一貫した西田像を提示することができると考える。

8) 「私と汝との関係について種々なる難問は、内界と外界とが対立し、各自が絶対的に自己自身に固有なる内界を有つと考えるから起るのであると云うことができる。我々が厳密なる意味に於て個人的自己の意識というものから出立するならば、遂に独我論に陥るの外ない」（五・272）。西田は、自己から見た他者の到達不可能性という問題構成自体を斥け、いわば他者の「謎」の位置を決定的にずらしているのである。

文献

西田幾多郎（2002-2009）、新版『西田幾多郎全集』、岩波書店

喜多源典（2015）「西田哲学における「他者」と「超越」」、『西田哲学年報 第12号』、西田哲学会、57-75 頁

熊谷征一郎（2005）「西田他者論における転回——共感的一致から応答的結びつきへ」、『西田哲学年報 第2号』、西田哲学会、128-142 頁

小林敏明（1997）『西田幾多郎——他性の文体』、太田出版

清水高志（2017）『実在への殺到』、水声社

藤田正勝（2011）『西田幾多郎の思索世界——純粹経験から世界認識へ』、岩波書店